

# 一 読総合法による物語文の指導（4年）

——「少年の使者」（東書4年）の  
補充教材として——

足利市立相生小学校 大 槻 直 佑

最初から全文章を読みとることをさせないで、授業の進むにつれて一枚ずつわたす。

話し合い（集団思考）を中心に作品を味わうよう進める。

「少年の使者」の発展でもあるため、ノートを使用せず、書き込みのみにとどめる。

## 教 材

『とびこみ』 レフ・トルストイ作

西郷 竹彦訳

## 目 標

- 物語の場面場面の表象を思いうかべながら読ませる。
- 文やことばをおさえて文章を読みすゝめるようにさせる。
- 読みの見通しや関係づけなどをもとに、文章の展開を読みとらせる。
- 少年の行為と、それにともなう気持ちのうつりかわりを読みとらせるとともに、少年の危機を救った船長の決断力と、そこにながれる愛情を読みとらせる。
- 読書への関心を高め、すゝんで読書する態度を養う。

## 時 間 配 当

## 三 時 間

第一時の流れを、話し合いを中心にのべる。（なお、重点的であることをまえもっておことわりしておく。）

## 展 開 例

### 第一 時

はじめに「とびこみ」と板書し、文題からの予想を話させた。（別項参照）

#### 例）

「この物語は、ある勇気のない子どもが、努力した結果『とびこみ』ができるようになるという物語だと思います。」

「つけをしています。外国の（作者名からわかった）小学校の（自分と結びつけて予想をたててる）生徒の中に、とっても弱虫の子がいて、水泳の時間にとびこみをするのがいやでいやでしうがない。」

この子は、みんなからいつもとびこみができるないといわれ、くやしくてしょうがない。そこで、こっそり放課後練習する。そして、とうとういちばん高いところからとびこみができるようになる。

ある日の水泳の時間、先生がとびこみをさせる。ところが、今までできなかつたこの少年がとびこみ台に上がったので、みんながワアワアさわぐ。でも、少年は平気な顔をしてとびこみ台に立っている。

ついにとびこんだ。これを見たほかの生徒たちは、今までワアワアさわいでいたが、きゅうにシーンとなってしまった。つぎの瞬間、拍手大かっさいとなる。

たぶん、ぼくはこういうような物語ではないかと思います。」

(このほか、「オリンピックの水泳競技と関係があるのではないか」というようを予想もあつたが、ここでは紙数の関係上省略する。)

○一枚目のプリントを配布する。

奪うように受けとり黙読開始。この時、どの子も『右手にえんぴつ』を持ち、「書き込み」を絶えず行なっている。（書き込みの実践については別項参照）

この際問題になるのは、どこで読みをやめるかということである。（立ちどまり）

立ちどまりについては、教材の質、教師の指導のねらい、子どもの読みの難易度などから決定される。しかし、今回は子どもの自由意志に任せることとした。

書き込みをしているあいだのようす。

- 「おや、主人公はさるかな」
- 「船乗りの話だ。」
- 「サーカスの話かな。」

上のようなささやきがあちこちでしている。このひとりごとが、書き込みとなってあらわれてくる。そして、話し合いに発展するのだ。

○指名音読（一名）

○話し合いによる学習にはいる。

指名音読が終るやいなや

「わかったことを言います。」

「思つたことを言います。」

「ぎもんを点を言います。」

と前置きをして挙手する。（別項、話し合いのルール参照）

（読みにはいったばかりでもあり、多少のまとはずれの発言、道草的話し合いもさせることにした。これらは次々にくりひろげられる物語の展開に即して、確かめられ、修正されていく。）

文 (1)

「一そうの船が、世界をまわって、かえりの旅にありました。おだやかな天気で、船じゅうの人々みんなかんばんに出ていました。大きなさるが一びき、みんなのなかでふざけまわって、人ひととをたのしませていました。そのさるは、からだをよじったり、とびはねたり、かおをこつけいにしかめたりして、みんなをからかいました。みんながよろこんでいるのを知っていたのでしょり。だから、ますます、ふざけまわっていました。」

「わからないことは。（挙手する場合には、かならず「話し合いのルール」にしたがって、自分の話そうとすることが何であるかを表示する。話し合いの項を参照）かんばんということばがよくわかりません。おしゃてください。ぼくは、たぶん船の上だと思うんですが。あの、ろうかみたいに坂のはつてある。」（難語句などについて、はつきりわからないときには、わたしの考えではこういうことではないかと思います、と言うことにしている。）

「予想と関係して。はじめ、題名からの予想をたてたけど、なんだかせんせんちがうみたい。だってさ、ぼく、メールと関係あると思ったけど、ここは海でしょ。だから……。」（予想の修正がはじまる。）

「頭にうかんだことを言います。あたしの頭にうかんだ場面なんだけどね。すごくひろい海のまんなかにね。ゆっくり一そうの船がはしってるの。空はずーと青くって、海もすごくきれい。波もとつてもしづか。」

「つけたしていいます。ぼくの頭にも同じようにうかんだんだけどさ。ぼくが思うにはね、ほかほかあつたかくて春みたい。だってさ、『おだやかな天気で、……』とあるでしょう。」（文をおさえてテレビ化している。ふつう、このような場合を、頭のテレビにうつすと言っている。—表象化）

「主人公について、あたしね、主人公は『大きなさるが一びき、……』とあるでしょ、このさるが主人公だと思うんだけど。」

「そりそり、ぼくもそり思う。」（全員が、主人公は大きなさるだといいう。）

「主人公について、ぼくね、この物語の主人公のね、さるがあるだろう。このさるはきっとサーカスのさるじゃないかと思うんです。だってさ、『ふざけまわって、人ひととをたのしませて…』とか『からだをよじったり、かおをこつけいにしかめたり…』とあるでしょ。ぼくが動物園で見たさるはこんなにりこうじゃなかつたもの。」

（主人公は、この一びきの大きなさる。それも芸のできるさるだということで話し合いが進む。）

「でも、このさる、ほんとうはかわいそうなさるかも知れないと思います。ここには友だちのさるものないし。さるは山にすんでいるはずなのに、人間につかまって、いまは船の上でしょ。あたし、この物語はきっと『フランダースの犬』みたいにかわいそうな物語になっちゃうんじゃないかと、ちょっと心配になっちゃった。」（今まで読んだ物語と関係づけて考えている。）

児童は、このさるが主人公だときめつけて、さるの大きさだとか、動作のようす、さるの性質、船

の人たちとさるとの関係についても話し合った。

児「見通しを言います。このあときつと、このさるがあまりふざけすぎて海の中へおっこちるんじゃないかと思います。そしてね、船の人たちがとびこんでこのさるをたすけるんだと思います。だから『とびこみ』という題だと思うんです。」（題名と関係づけての見通し。）

この見通しが出たために、きゅうに反対意見や賛成意見がでて、「見通しを言います」「いまの見通しにつけたして」と話し合いがながくなりそうなので、以上で打ち切り、先へ進んでみることにした。

## 本文(2)

さるは、船長のむすこで、十二才になる少年にとびかかり、少年の頭からぼうしをひったくると、それをかぶってするすると、マストの上へよじのぼってしました。みんな、ふきだしてしまいました。でも、少年は、ぼうしをとられて、わらっていいものやら、おとっていいものやら、わかりません。さるは、一ぱんめのマストの横げたにこしをかけて、ぼうしをぬぐと、歯やつめでひきさきはじめました。まるで、ばかにするみたいに少年をからかったり、かおをしかめでみせたりしました。少年は、さるをおどしたり、どなりつけたりしていましたが、さるは、ますますむきになって、ぼうしをやぶりはじめました。

### ◎二回目の立ちどまり

◎右手にえんぴつで「書き込み」（默読をしながら、一つのことば、一つの文に対して、また、前のことば、前の文、前の段落との関係づけなども行なわれている。なお、文法的なことがらについても、書き込みの記号にしたがって行なわれている。）

児「あれ、主人公はさるじゃなさそうだぞ。」

児「少年がでてきた。」

児「少年が主人公かな。」

児「わるいさるだなあ。」

書き込み中に、このような「ひとりごと」が、あちこちから聞こえてくる。

児「先生、先生。」

教「もう書き込み、終わつたの。」

児「ううん、だけどさ、主人公がどうも。」

（もう、がまんができなくて挙手してしまう児童があらわれる。意欲的に読み進められていることは事実である。なお、話し合いは、全員の書き込みがおわってからである。）

### ◎指名音読（一名）

### ◎話し合いによる学習

（話し合いにはいる前に、マストと横げたについては、黒板に絵を書いておいたので、質問もなかった。）

「見通しと関係して。さつきね、みんな主人公は『大きなさるだ』といったでしょ。だけどね、いここよんだら、どうも少年のような気がしてきたの。この少年が船長のむすこだと書いてあるから、よけいそんな気がしてきました。(主人公の修正)

それから、さつきの見通しでは、このさるが海におちてしまうといったでしょ。反対の人もいたけど。でも、ほんとうはまったくはんたいで、のぼっちゃつたんです。」

思ふことを言へます。ぼくは、たぶん船長のむすこである十二才の少年と、このいじわるさるもののがたりだと思います。」

(この児童は、さるではなく『いじわるざる』といっている。のことから、『あはれざる』だの『お調子者』だのとだいぶさるの悪口ができる。)

「ぎもんを点。この船長のむすこは十二才でしょ。だけど、世界一しうななんかしてて学校へ行かないんかなあと思います。へんだと思います。」(自分の生活と関係づけている。『世界をまわつて、かえりの旅にありました。』の文と、『十二才……』とを関係づけて考えている。)

「この物語は、ずいぶん昔の物語だと思います。なぜかというと、マストや横げたがあるのは、ほのある船だから。」

「さるのこと。前のところを読んだときは、ゆかいなさるだと思ったんですけど、ここのことろ読んでみてね。『少年にとびかかり』とか『ぼうしをひつたくる』とかそれから『歯やつめでひきさきはじめました』と書いてあるでしょ。すごくいじわるで、いやーなさるに思えてきちゃつた。」児「ほくもね、このさるきらい。というのはね。『まるで、ばかにするみたいに少年をからかつたりかおをしかめてみせました。』とあるから。人間をばかにするなんて、ちょっとこのさるをまいきだと思います。」

(このさるについては、『さるは、船の人たちをたのしませるためにやつしたことだ』と、さるに対し好意的立場の者もあり、さるのことについては、全員が同じ受けとり方はできなかつた。)

児「少年の気持ちで。少年は、さるにぼうしをとられてしまつたでしょ。そのとき『みんな、ふきだしてしまいました。』と書いてあっても、これは、バカにしてわらつたのではなく、ただ、この時のようにあまりおもしろかったからわらつたので、ほんとうは、船長のことをいつもかわいがっている人たちばかりだと思います。このわらつた人々は、みんないい人ばかりだと思います。」(ここで、少年とさる、それを見ている人々、と三者の関係をふまえての場面のテレビ化(表象化)をしている。)

児「ほくがこの少年だったらね。やっぱりこの少年みたいにものすごく頭にきちゃうな。たとえ、船の人たちがわらわなくたって、こんなにさるにからかわれればやっぱりおこっちゃう。」

児「さるがかおをしかめてというところは、たぶんこんな顔だと思うんだけど。」

(動作化をして見せる。みんなにてるにてると言い、他の児童が、少年のおこった顔つきを動作化してみせた。この動作化については、特に低学年においてはたいせつではなかろうか。)

(以下話し合いとしてつぎのようなことがらが出た。)

・このさるは、少しふざけすぎてしまったようだ。きっとあとで少年にしかられる。

・このさるは、なかなか強いつめと強い歯を持っている。

・世界を一まわりしているとき、少年にいじわるされたことがあり、そのしかえだと思う。

- ・このさるは、あまり少年になれていないと思う。)
- ・少年のぼうしは赤い色だと思う。
- ・少年の名前が書いてないけど「ピーター」だと思う。「トム」だと思う。「ロバート」と思う。  
(各自、自由に名前をつけた。)
- ・さるは一ぱんめの横げたにこしかけて……とあるけど、木のぼりがうまいからおちないとと思う。
- ・ぼうし一つぐらいでこんなにおこることはない。
- ・いちばんすきなぼうしだからおこつたと思う。
- ・一つきりぼうしをもつていないから、それをやぶかれたのでおこってしまった。

#### ◎ 見通し

児「やっぱりさるが海へおちるんじゃないかと思います。いまさるは、マストの横げたにこしかけて少年のぼうしを歯やつめでひきさいでいるでしょう。だから、きっと、ばちがあたっておつっちゃうんだと思う。さるも木から落ちるっていうから。そして海におちたさるを、少年がとびこんで助けてやり、それからはもう少年にいじわるしなくなっちゃうんだと思います。少年に助けられてからは、まるで少年のけらいみたいになり、少年の言うことならなんでもきくと思います。(このほか二名の児童の予想を発表させつぎへすすむことにした。

#### 本文(3)

船員たちは、ドッと、わらいこけました。少年はまつかになつて、ジャケットをぬぎすてると、さるのあとをおつかけて、マストへとびつきました。アアといつまに、ロープをつたって、はいあがりました。ところが、少年がぼうしをつかんだかと思ったとたん、さるはすばやく身をかわして、さらに上のほうへ、よじのぼつてしましました。

「ようし、にがしはせんぞ！」

とさけび、少年も上へはいのぼりました。さるは、またもや、少年においでおいでのをして、ますます上へのぼっていきます。だが、少年のぼうも、すっかりむきになつてしまい、負けじとおいかけます。こうして、さると少年は、いっしょに、いちばん上までのぼりつめてしまいました。いちばん上で、さるは、あるつたけからだをのばすと、あと足でロープにつかまりながら、いちばん上の横げたの先に、ぼうしをひっかけ、じぶんは、マストのてっぺんによじのぼり、そこでからだをくねらせ、歯をむきだして、キャラキキャラと、おおはしゃぎしました。

#### ◎三回目の立ちどまり

#### ◎書き込み(黙読)

#### ◎指名音読(一名)

#### ◎話し合い

ここでとくに目立った点としては、

児「 ようし、にがしはせんぞ！」という言い方は、もうぜつたいてにがさないと強く言っている感

がします。」

「そうそう、『せんぞ』の『ぞ』が強い気持ちをあらわしているようを感じがします。」

「ときには、読解中に文法的問題も出てくるが、あまり深入りしないようにする。」

「船員たちは、ドッコと……とあるでしょう。そして、『さると少年は、いつしょに、いちばん上までのぼりつめて……。』と書いてあるでしょう。こここのところから頭にうかんだことを言います。きっと、船員たちはわらってばかりいて、ちっとも注意したりしなかつたから、少年は、さるをおかけてマストの上のほうへいってしまったでしょ。もうおりられなくなっちゃうと思うんです。」  
「そうそう、つけたします。なぜかと言うとね。いま、さるをむちゅうでおいかけているんでしょ。だから、マストの方までぼってきただことも、なにも頭にないと思うんです。頭にあることは、上にいるさるとぼうしのことだけでしょう。だから、あとで気がついて、はつとして、マストから落ちるようになるかも知れない。」

「ぎもんを点について。前の『船長のむすこで、十二才に……』と関係してくるんですが、まだ船長があらわれないんだけど、それに、おかあさんもこの船にいるんじゃないかと思うんです。」「わたしもそう思うんです。『少年の使者』のときも、おとうさんとおかあさんがいつしょだったでしょ。ちょっとこの物語もてている点があるように思えるん。だってさ、隊長と船長でしょ。そのむすこの少年でしょ。だからおかあさんもいると思うんです。」

以上のように授業を進めたわけであるが、第二時、第三時については紙数の関係で省略する。

なお、本文(3)を全員で「表現読み」してまとめとした。

「表現読み」ということについて一言ふれておくが、「表現読み」というのは「朗読」とは質を異している。これは、物語文で自分のいちばん気になつた部分ときには全文を音読し、その場面・登場人物の性格なりを自分なりに表現してみようということである。

第三時間目の指導案より「予想される学習活動」を示し、物語文の指導=授業展開のまとめとした

### 予想される学習活動

#### ○話し合い

- 前時に読みとった内容と見通し(予想)(いま船の上では何がおきているか、少年はどうするだろう。)

#### ○読み——書き込み

- 新しい登場人物(船長ー父)をおさえる。
- 船長の判断と少年ー(両者の対応)

#### ○話し合い

- 関係づけ
- 「そのとき」ということばのおさえ。
- 父と少年の態度や気持ち。

- 表象化( テレビ化)

- 緊迫した船上の場面の中の少年と船長。

- 感想出し

- 父の決断……他の船員や少年のようすとの対応をもとにして……

- 部分表現読み

- 予想、読みの見通し

- 少年はどうなるだろう、船長はどうするだろう。

- 読み——書き込み

- たたみかけるような記述で事件が解決されるさまを読みとる。

- 話し合い

- 感想出し

- 少年がたすかってよかったです

- 船長は、なぜ鉄砲をかまえたか

- 父の愛情

- 関係づけ

「とびこめ、でないとうつぞ！ 一、二、三……」ということばと、前の部分

- 父子がだき合う場面と前の場面

- 表象化

- 船長の決断と少年のようす

- 少年のたすけあげられる場面

- しっかりとだき合う場面

- 感想出し

- 物語の展開を回想しつつ

- 船の決断について

- 読み

- 表現読み